

[施業研究室]A. 森林の施業に関する研究 : 2. 竹林の合理的施業に関する研究

青木, 尊重
九州大学農学部附属演習林 : 助教授

柿原, 道喜
九州大学農学部附属演習林 : 助手

<https://doi.org/10.15017/1456130>

出版情報 : 演習林研究経過報告. 昭和38年度, pp. 5-6, 1964. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :

なお、間伐度合、間伐木選定方法については未だ確定していないが、この問題は、現地林分を更に詳細に分析して決定する予定である。

2. 竹林の合理的施業に関する研究

青 水 尊 重
柿 原 道 喜

1. はじめに

従来 of 竹林のとり扱い方法をみると、農家の私有林が多いこと、小面積の竹林が多いこと、伐期令が低いこと等の理由により、一般に粗放であつて不良竹林が数多くみられる。一方、竹材は建築用材、農漁業用材、家庭用品、各種玩具に利用されるほか、筍は食用に、枝条は燃材や竹箒に、落葉は肥料というように各種の用途があり、しかも近年は工業原料材としても利用され、その需要は増加の一途を辿っている。そこで、竹林の合理的施業法をあきらかにして優良竹林を造成し、竹材生産量を増大することを目的として本研究を開始した。

2. 試験方法

作業法を左右する二大要因である伐採季節と伐採率を組み合わせ、伐採季節は春伐(3月下旬)、夏伐(7月中旬)、秋伐(12月中旬)の三季節に、伐採率は簡便化・普編化しやすいように全本数の $1/3$ 伐、 $1/2$ 伐、 $2/3$ 伐の3段階に区分し、両者の組合せによつて生ずる9種の作業法につき更新状況を考察することとした。

試験地は粕屋演習林ノ林斑る小班内モウソウタク林(0.36ha)および大分県速見郡日出町所在の大分県有マダケ林(0.27ha)に、昭和36年度に設定した。

3. 結 果

毎年更新状況を調査し、目下とりまとめ中であるが、マケケ林について、1/3 伐採した場合の、伐採季節の違いが竹林の更新におよぼす影響については、次の結果が得られた。

秋伐区は、春・夏伐区にくらべ発筍本数、新竹本数最も多く、また径級も最大で、この結果、束数、実材積も他の2区より多い。また恢復率も最大で枝下高も一番高い。このことから秋伐作業は、径級の大きい枝下高の高い形質良好な竹材を生産するのに最も適した作業法といえよう。

夏伐区は、発筍本数、新竹本数は秋伐区に近い数値を示すが、径級が小さいため、束数、実材積ではかなり劣っており、枝下高も低い。しかし、春伐区にくらべるとよい結果を示しており、秋伐区についてよい作業法と思われる。春伐区は、夏・秋伐区にくらべ生産量最も少なく、しかも恢復率は僅か67%にすぎないことから更新上最も不適当と判断される。

以上の結果から、竹林の施業上の問題点として次の事項が指摘できる。

竹林の更新上は秋伐が最もよく、他の季節特に発筍前の伐竹はなるべく避けた方がよい。やむを得ず春や夏に伐竹した場合は、除草、施肥、客土等の積極的な保育手段を施すべきである。また、伐採率が増加した場合は、病害に犯されるおそれが多く、また、実材積、恢復率等は、伐採率の増加にしたがって減少することが認められるので、強度の伐採を行なったときは保育施業を施すとともに、病害虫に対する周到な保護管理が必要であろう。